LOST IN

藤岡　巴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＳＴ　ＩＮ

【Ｎコード】
Ｎ８９０９Ｘ

【作者名】
藤岡　巴

【あらすじ】
不可思議なものが視える青年、篠田樹と、もっと不可思議な黒服に眼帯の大学の同級生、依月怜奈。
ある時から樹は『影の病』に遭遇する。ドッペルゲンガーに遭遇した人は近いうちに病死するという話のある中、何故か妙なものの視えない怜奈の部屋に匿われる。影から逃げる樹を待つのは――――

雨音は夜に消える（前書き）

小説、初心者です。
解りにくい点、表現不足などあると思いますが、ご了承ください。

雨音は夜に消える

昔から、見えるはずのないものが見えた。

物心が付いた時には既に見えていたそれは、他の人達には見えていないようだった。

何というか、そういう類のものに少し敏感な体質なのだろう。

ただ、見えるだけ。他には何の力も無い。

ぼんやりとしか見えないものもあれば、はっきりと見えるものもあるそれらに、小さい時は何の疑問も感じてはいなかった。それゆえに、人に話して気味悪がられた事もある。

大きくなってからは、それを口にする事は無くなった。

たまに見える不可解なものを、ぼんやりと眺める。

自分にしか見えない世界を。

自分だけが見えているものを眺めている。

はずだった。

大学に入ってから始めての秋がやってきた。

まだ少しの夏らしさを残した昼の陽気に比べると、朝や夜はすっかり肌寒い。

キャンパスの敷地内にある木々も少しずつ赤や黄色に葉の色を変えつつある、秋真っ盛りの１０月の終わり。

「…さすがに、雨に降られると寒いな、」

篠田樹(しのだいつき)は、すっかり暗くなった大学の敷地内を歩いていた。
少し襟足の長い髪に緩めの服を着た樹は、コンクリートに打ち返されて流れていく大粒の雨を見て、持っている黒い傘を風上に傾ける。
夕方から降り始めた雨は、秋から冬へと確実に冷えた空気を運んできていた。
なぜこんな時間まで大学に残っていたかと言うと、友人が彼女と喧嘩をしたと言うのでその話を聞いているうちに、何故かその彼女までやってきて二人の話を聞く事になり、最終的に和解させているうちにこんな時間になってしまったのだ。
何故だか、昔から人の話を聞いたり相談されたりする事は多い。
ちなみにその友人はというと、仲直りした彼女と早々帰ってしまったのだが。
友人とその彼女を見送って自分の荷物を取って外に出てみると、昼間の温かい陽気とは裏腹な大雨が降っていたので、カバンに入れていた滅多に使わない折り畳みの傘を使うハメになってしまった。
雨のせいで余計に暗くなったキャンパスの敷地内を、一人家路を急ぐ。
人気の無くなった道を、足早に近くのバス停へと歩いていた。
こういう日は、見えやすいのだ。
見えるからどうという訳ではないが、やはり気分のいいものではない。
小さい時から見慣れているとは言っても、突然現れたり、はっきり見えすぎてしまったりするものには当然ながらいつも驚かされる。
それを回りに居る人に不審に思われていないか、いつも少し心配していたりする。
風向きが変わって、肩に背負っていたカバンが背中からの風と雨

に煽られた。
それを回避しようと傘を後ろに傾けた時――――――
白いものが、視界の隅に入った。
「――――……！」
一瞬ぎょっとなって、足が止まる。
慣れているとはいえ、やはりこういうものは気味が悪いのだ。
素通りしてもいいのだが、知らない方が怖いと思う本能があるのか、いつもその時に見えた不可解なものを確認してしまう癖がある。
雨音だけが響く影の落ちた広い通路の脇。
気味が悪いとは思うが、不本意ながら場慣れしている樹は、視界に入るそれへと顔を向けた。
その白いものは、樹の歩いている右側のところどころに植えられている少し離れた木の中の一本に、実を付けるかのようにして葉と葉の間からぶら下がっていた。
白い人の手。
「……」
マネキンでも木に引っかかっているのではないかと思うような、場違いな違和感。それはじっとして動くこともなく、そこに存在していた。ただ存在するだけなのに、生きた気配を感じないのに、息遣いすら感じそうな程の、確実にモノではないという不気味な違和感。
雨音だけが聴覚を支配する冷たい通路で、樹は一人それを眺めていた。
人通りは無い。時間はもう既に9時を回っている。
「……やば、」
ふと、バスの時間が近い事に思い当たった。
バスの便は然程多くないので、逃すとこの雨の中しばらく待たなくてはいけなくなってしまう。

急いで行かなくてはと、樹は前に向き直って歩き始める。
そして再び、樹は驚いて足を止めた。

樹が行こうとする通路の先に、いつの間にか人影が立っていた。
その女は、全身を真っ黒の服で覆い、周りの闇と溶け込むようにそこに立っていた。
誰もが美人と認めそうな凛とした顔立ちに、ぼんやりとした雰囲気を漂わせる表情。そして何より目を引くのは、灰色がかった色の髪と、そこから覗く右目を覆う白い眼帯。少し間違えば鋭いとすら取れるような目。暗闇でも解る程蒼白な顔をした彼女は、何かをぼーっと眺めているようだった。
それは、樹の知っている人物だった。
大学で何度か見かけた事のある、同じ学年に居る女の人。
そして、彼女の見ている先にあるものに気付いた時、樹は少なからず驚愕した。

彼女は、さっきまで樹の見ていた木をぼんやりと眺めていたのだ。

無表情に目の前に佇む彼女に、樹はしばらく呆然と目を奪われた。暗闇の中に立つその姿は、まるで絵のように綺麗だった。
雨の音すら忘れるような時間が過ぎる。
そうしているうちに樹は、とんでもない事に気付いてしまった。
彼女は、傘をさしていなかった。
土砂降りの雨の中、ずぶ濡れの状態でそこに立っていたのだ。
「…おいっ、」
樹は、思わず彼女に駆け寄った。そして、自分の持っていた傘を彼女にかける。
突然駆け寄ってきた樹をその凛とした目で樹を見ると、少し訝しげに眉を顰めた。
「何やってんだよ、こんなになって、」

「……別に。」
「別にって、ずぶ濡れだろ、」
すると彼女は、樹の方を見るその目をすうっと細めて答えた。
「…あんたもずぶ濡れなんだけど。」
「……あ。」
傘を差し出した樹も、バケツをひっくり返したようなこの雨の中では彼女と同様にあっという間にずぶ濡れになってしまっていた。
「あー…俺は大丈夫…って、しまった、」
慌てて大学の外を見ると、樹が乗るはずだったバスが調度走り去っていくところだった。
灯の付いたバスが、どんどん遠くなっていく。
それを見た彼女が、抑揚の無い声で尋ねた。
「…遠いの？家。」
「あー、バスで15分くらいかな。まぁ、歩けばいいか。」
そう言うと樹は、持っていた傘を彼女に差し出した。
「今更だろうけど、これ使って。返さなくてもいいからさ。」
しかし、その差し出した手を無表情に見ているだけで、受け取ってくれない。
雨は弱まる事なく降り続いていて、こうしている間にも2人を冷たく打ちつけてた。
微妙な間が、雨音の中で過ぎる。
「……あの、」
樹が声を掛けた途端、下を向いていた彼女は突然すっと顔を上げて樹を見ると、傘を差し出している樹の腕を乱暴に掴んだ。
「え？」
そして、困惑する樹の腕を掴んだまま黙って何処かへ向かって歩き出した。
既に、持ったまま横に放り出された傘は雨避けの役割を全く果たしていない。

これが、彼女、依月怜奈（いつきれいな）との出逢いだった。

全ての出逢いには意味がある。
それがどんなに小さなものでも、些細な事でも。

この出逢いは、何万何億と繰り返される出逢いと別れのたった一つに過ぎない。
けれどそれは、必然と言う名の出逢い。

影は隙間に消える

ずっと、気になっていたのだ。
初めて見かけた時から。気が付いたら、目が離せなくなっていた。

大学に入学後、一人の同級生がちょっとした噂になった。
『黒服に灰色の髪に眼帯の美人が居るらしい』
人間というものはミステリアスなものに惹かれたり興味を持ったりするらしい。彼女のその雰囲気は、そういう興味を引くには充分過ぎる要素だった。
樹が彼女を始めて見たのは、寝過ごして抗議に遅れて飛び込んだ時の事。
教授達に見つからないよう後ろの方からひっそりと抗議に紛れ込んだ樹は、代返を頼んだ友人を探すために回りに視線を巡らせていると、いつもは気にかける事の無い最後尾の一番端の席が目に入った。
そこに座っていたのが、噂通り黒服に眼帯をした美人、依月怜奈だった。
彼女は人の中を避けるようにして、最後尾の一番奥に座っていた。
樹は周りの言う美人だからとかいう理由での興味は無かったが、その時何となく、片目で遠くから抗議を受けていてちゃんと文字が見えているんだろうかと気になった。

その後も彼女は、いつ見かけても眼帯をしていた。
怪我にしては長いなと、少し不思議には思っていた。
彼女はいつも一人だった。綺麗だからという理由もあるだろうが、何より、近寄りがたい雰囲気を持っていたからだろう。そして彼女も、誰も寄せ付けようとしていなかった。
それを勿体無いなと思った事もある。

それがいつの間にか、彼女を見かけたら目で追うようになっていた。
恋愛感情の自覚は無い。けれど周りから見ればそう見えたらしく、友人に真相を問いただされた事もあった。

そして何故か、今自分はその依月怜奈の部屋に居る。

「……あの、ごめん。」
「…何？」
突然の謝罪に、怜奈は訝しげに眉を顰めた。
「いや、何か、迷惑かけて…。」

数十分前。
ずぶ濡れになった怜奈を見つけて傘を差し出した樹は、同じくずぶ濡れになったあげくバスに乗り過ごし、無言の怜奈に引きずられるようにしてここまで来た。
彼女の住むアパートは、大学からそう離れていない、徒歩5分程度の場所にあった。
玄関を入ると怜奈はずぶ濡れのまま部屋に上がり込み、バスタオルとバスローブといくつかのハンガーを樹に手渡すと、服は浴室内に吊るしておけと言い残して、そのまま樹を浴室へ押し込んでしまった。
呆然とする樹は有無を言わさぬ怜奈の目に気圧されて、成すすべも無くシャワーを浴びるハメになってしまったのだ。
これでは立場が逆だった。
手を差し伸べたつもりが、差し伸べられて迷惑をかけてしまっている。男である樹が、怜奈の男気に完全に負けてしまっていた。
樹が出てきた後、彼女は入れ代わりにシャワーを浴びに行った。

見ず知らずの男を部屋に上げておいてこの無防備さは何だろうとも思ったが、最初からそんな気の無い樹は怜奈の思惑通りにリビングで一人、テレビも付けずに座っていた。
これでは本当にどちらが男か解ったものではない。
そしてシャワーから上がってきて、またもや黒い部屋着に身を包んでいる怜奈を見て最初に出た言葉が、こうなってしまった事に対する謝罪の言葉だった。

「別に。あんたが濡れたのもバスに乗り遅れたのも、私のせいだから」
そんな事大した事ではない様子で、怜奈はそっけなく答えた。
「それより、悪いね。バスの便もう無いんじゃない？」
「ん？ああ、いいよ。タクシーでも使うから。それに、家にはちょっと帰りたくなくてね。今日もその辺のネカフェにでも泊まろうか迷ってたんだ」
「そう」
実際、そうなのだ。着替えを取りに帰ろうかとも思っていたのだが、帰らなくていいのならむしろそれでもよかった。
「…この近所に彼女や友達は？」
「彼女居ないから。友達は近所に居るけど、実家通いの奴だからこんな時間に迷惑かける訳にもいかないしさ。…そっちこそ、俺みたいな奴家に上げて彼氏に怒られるんじゃない？」
「そういうの居ないから」
「ああ、そうなんだ…」
無表情に答える怜奈に、樹はそう曖昧に濁した。
こんな美人に彼氏が居ないのは意外だが、この怜奈の雰囲気を考えると何となく納得も出来た。
何処か浮世離れしている印象のせいもあるが、何より他人を心から受け入れないだろうという雰囲気がひしひしと伝わってくるのだ。
俗に言う、一匹狼というやつだ。

「――それより依月さんはさ、」
言いかけたところで、突然名前を呼ばれて怜奈は少し不可思議そうな顔をした。
「…名前、知ってんだ？」
「え？ああ、同じだったから覚えたっていうか――――」
「同じ？」
「俺、樹って言うんだよ、篠田樹」
「そう。――――で、何？」
「あー、いや、答えたくなかったら別にいいんだけどさ、何で普段眼帯なんかしてんだ？怪我でもしてるのかなと思ってたから…」
怜奈がシャワーから上がってきた時からずっと思っていたのだ。
家ではいつもそうなのか髪が濡れているから遠慮したのかは解らないが、怜奈は眼帯を外していた。
そして樹の想像とは裏腹に、いつも隠されている右目には傷一つ無かったのだ。焦点が合ってない、ということも無さそうで、どう見ても普通にしか見えなかった。
そしてしばしの沈黙の後、やはり聞いてはいけなかったのかと樹が後悔していると、怜奈は無表情のままその質問に答えた。
「――――右目は、見え過ぎるから」
「…え？」
怜奈はそれだけ答えると、ＰＣの置いてあるデスクの椅子に腰掛けた。
そして、首にかけていたタオルで濡れたままになっていた髪を拭う。
「……」
「……」
微妙な間が流れた。
その『見え過ぎる』という言葉に、どうしても引っかかったのだ。
普通、眼帯は目が見えないから、不自由だから、怪我をしている

からするものだ。
今の彼女の答えは、どう考えても矛盾しているものがある。
だから、樹は確かめたかった。
あの時思った疑問を。
「……何が、見え過ぎるんだ？」
どうしても、気になって仕方がなかった。
あの土砂降りの雨の中、怜奈は確かに樹と同じものを見ていた気がしたのだ。
あの、白い手のぶらさがった木を。
少し緊張したような面持ちで返事を待つ樹を、怜奈は無表情のまま見返している。
数瞬の間樹の表情を観察しているように見えたが、訝しげに目を細めて答えた。
「……さあね」
さらりとした返事だったが、それが見えているという返事だと言う事は解った。
「…そっか。」
見える相手に逢うのは始めてだった。けれどそれゆえに、樹はどう話せばいいのか解らずに言葉に詰まってしまう。
この彼女も、自分と同じようにいつも沢山の見えないはずのものを見ているんだろうか。誰にも打ち明けられずに。けれどきっと彼女の事だから、誰にも打ち明けようとすら最初から思ってなどいないかもしれないが。
「…ところで」
「え？」
下を向いたまま考えを巡らせていた樹に、無感動な声が投げかけられた。
「泊まってって構わないよ。帰りたくないんでしょ？」
さすがに動揺した。初対面の女の子にこれ以上面倒をかける訳にはいかない。

「いや、大丈夫だよ。どっか適当に探すからさ」
「服、乾いてないよ」
「う…、でも、これ以上迷惑かける訳には――――」
言いかけた時、窓の外が青白い光が広がったかと思うと、ドーンという大きな音が一帯に響いた。
雷が近いらしい。
窓に打ち付ける雨音も、ここに来た時より一層激しさを増しているようだった。
怜奈は横目で窓を一瞥すると、小さく溜息をつく。
「――――外に出たいなら、出ても構わないけど」
「……すいません。」
こうして、完全に怜奈のペースで話が進み、今日の宿が確定した。

＊

翌日の朝、怜奈の家のソファーで眠っていた樹は、着替えをすっかり終わらせた怜奈によって起こされた。浴室の乾燥機にかけられた服はすっかり乾いていて、着替えを済ませて出てきた樹を待っていたのは、朝食だと言って用意されたトーストとコーヒーだった。
最早謝罪の言葉しか浮かばない。
冷たそうに見えるが、怜奈はそれなりに人の面倒は見るタイプの人間らしかった。きっとそんな事を本人に言ったら黙って睨まれるのだろうけど。けど、面倒見が良くなければ、帰りたくない理由も知らない初対面の人間を泊めてくれたりはしないだろうと樹は思う。

謝罪とお礼をひとしきり言い終えると、樹は怜奈より先に大学へ向かった。
時間はまだかなり早いが、何せこのアパートは場所が大学に近いため、通学途中の同級生や友人に見つかれば何を言われるか解らないと思ったのだ。彼女など居ないと公言している樹にとって、噂の美女・依月怜奈の部屋から、しかも朝に出てくる、というのはなかなか大変な自体になりかねなかった。何しろ、彼女とは昨日が初対面だったのだから。
そんな事を考えながら、樹はまだ肌寒い朝のキャンパスへと向かっていた。
雷を連れた昨夜の雨はすっかり止んでいる。
雨上がりの冷たい空気を、樹はすぅっと吸い込んだ。こういう朝の空気は好きだ。まだ何にも汚れていないような、新鮮な空気。昼間の熱を逃がすような夜の空気より、こういう朝の冷えた空気の方が気持ちにもリセットがかかるような気がするのだ。
ざあっ、と音を立てて、風が周りにある木々の葉を揺らした。まだ乾ききらない木々から、昨夜の大雨の名残でもあるたくさんの水滴が落ちる。
そして、昨日のあの場所で立ち止まった。
白い手のぶら下がっていた木の近く。
もうその手は見えず、妙な気配も無くなっている。そんなものだ。今日見えたから、そこに居たからと言っても、次の日もそこに居る訳ではない。移ろい行くもの。
そして、昨日ここで怜奈に逢った時の事を思い出して、樹は深くため息を付いた。
話せた事は、正直に嬉しいと思う。樹は他人と関わるのが嫌いな訳ではないので、話した事のない人と話せたのは嬉しかった。ましてや、それが気にかけていた人物となれば尚更。
だが出逢い方はともかく、その後の事が樹の気を少し重くしたの

だ。初対面の人に迷惑をかけてしまったという罪悪感がどうしても拭い去れない。
「…何か礼しないとな」
このままでは自分が納得出来ない。とりあえず相手の受け入れる範囲内でのお礼をしなければと思った。

校舎内に入った樹は、特に行く当ても無く1時限目の抗議のため、教室に向かっていた。廊下を歩くまばらな人の姿はあるが、恐らく樹同様に教室を目指しているものはまだ少ないだろう。
こつこつと、靴の音がやけに大きく響く廊下。
まだ抗議が始まるまで時間があるので、音楽でも聴きながら寝ようと思っていた。
そして教室の前までたどり着いた樹は、まだ電気も付いていない薄暗い教室の扉を開けた。
するとそこには、もう既に一人の青年が座っていた。
少なからず驚いた樹は、とりあえず挨拶をする。
「おはよー」
返事は返ってこない。
その青年は、樹がいつも座っている辺りに一人で座り、何も書かれていない、誰も居ない教台の方をじっと見つめていた。
電気も付けずに。
荷物も持たずに。
「……」
何だか妙な感じがして、樹はその青年を横目で見ながら奥の方へと歩く。
物音がしても、振り返る事すらしない。真っ直ぐに前を見ている。
ゆっくりと目に入っていくその青年を見て、段々自分の頭から血の気が引いていくのを感じた。
その人物は、樹とよく似た風貌をしていた。
その人物は、樹と同じ格好をしていた。

その人物は、樹と同じ髪型をしていた。
そして樹は、それに見覚えがあったのだ。
「……！」
完全に足が止まった。
喉が妙に渇いている。息を呑むと、ごろりとした感触が喉の奥へと押し込まれた。
青年は動かない。まるで人形でも座っているかのようだった。
だがその人形のようなものから感じる、冷たい気配。温度の無い気配。
大概のものには慣れていて、気付いても見て見ぬふりの出来る樹だが、これは、これだけは絶対に確かめなくてはいけなかった。
確認する必要があった。
樹が家に帰りたくない理由が、目の前にあるこれだったのだ。
自分を模したような、自分そっくりの何か。
経験から言って、樹はこれを生きた人間だとは思っていなかった。
「……」
自分の息遣いが、やけに大きく聞こえる。
樹はゆっくりと、それに向かって歩き出した。
こつっ、という靴音が、教室に響いて消える。
確かめなくてはいけない。確かめなければ、安心して家に帰る事すら出来ない。

こつっ――――、こつっ――――――――――、

たった数メートルの距離が、やけに長く感じる。
だが、樹の中にある恐怖と焦りが、確実に一歩ずつ距離を縮めていた。

こつっ、

樹は、相手の1メートル程後ろで立ち止まった。
相手まで聞こえてしまうのではないだろうかと思う程、心臓の音が自分の中で響いている。
青年は、やはり動かない。
そして樹は、その青年の肩へと手を伸ばした。
「……おい、」
肩に手が届くか届かないかのところで、青年が、突然すぅっと立ち上がった。
「――――――！」
樹は驚いて、伸ばしていた手を止める。
すると青年は、出入り口の方に向かって突然走り出した。
「ちょっ…！」
青年はあっという間に出入り口まで走ると、半分くらいだけ扉を開けてその隙間から滑るように外へ出てしまった。
樹は慌てて追いかけると、扉を思い切り開け放つ。
「おいっ、待てっ！」
しかし、そこにはもう青年の姿は無かった。
がらんとした廊下に、樹の声だけが響く。
「……はぁ」
「……樹。何してんだ？」
「…え？」
違う扉から、2人の知った顔がこちらを見ていた。
昨日喧嘩話をして、仲直りして帰っていった友人、西野直人と、その彼女。
「…いや、何でもない。おはよー」
扉を閉めて曖昧に笑ってみせる樹に、2人は不思議そうに顔を見合わせた。

思考は時に消える

「……お礼？」
「そう。お礼と言うかお詫びというか」
「ふぅん…。…なら、行きたい所があるんだけど」

そう言って怜奈に連れて来られたのは、大学の近くにありながら、裏道になっているのであまり皆知らないであろう煉瓦造りのレトロな雰囲気のある喫茶店だった。
一日の講義が終わった後、大学内で怜奈を見かけた樹は、慌てて怜奈を呼び止めた。
その際、『依月さん』と、呼ぶと何故か思いっきり呆れた顔をして睨まれてしまったのだが。
どうやら彼女は、『さん』付けで呼ばれるのがあまり好きではないらしい。
喫茶店に入ると、彼女は慣れた様子で一番奥の窓際の席へと座ると、アイスコーヒーとサンドイッチを注文した。どうやらこの喫茶店は、彼女の行き着けらしかった。樹の方も、とりあえず同じものを頼む。

「――それで、今日も家には帰らないの？」
テーブルに頬杖を付いて、彼女は目の前のアイスコーヒーをカラカラと音を立ててストローでかき混ぜていた。相変わらずのぼんやりとした無表情で、その氷の回るグラスを眺めている。
「あー、今日は帰ろうかなと思ってるよ。家でも外でも関係無いって分かったしさ」
「…どういう意味？」
怜奈は少しだけ、視線を樹の方に上げる。
「…家にさ、自分そっくりな奴が出るんだよ。俺かどうかは判ら

ないけど、見た感じが自分と同じ気がしてさ。髪型とか、服装とか。毎日ではないんだけど、段々頻度が多くなって。今日朝早くに大学行ったら、教室に居たんだよ。だから、もう場所とか関係無いなら帰ろうかと思ってさ」

「…それ、見かけたらどうしてるの？そのまま？」

「まさか。とりあえず自分かどうか確かめないとと思って近寄るんだけど、いつも逃げられるというか、今日も扉から出て行ったらもう居なくなってててさ」

「へぇ…」

怜奈は少しだけ樹の顔を観察するように見ると、抑揚に乏しい声で言った。

「ドッペルゲンガーってやつ？」

「やっぱそうなるよなぁ、」

「本当に影の病なら、近い内に病死だな」

そんな事を、彼女はまるで興味無さそうにさらっと言ってのけた。

折角の美人なのに、たまに男の子が混ざったような口調で喋る。

「あっさり言うなよ、で、影の病って？」

「…知らないの？」

怜奈は小さくため息を付くと、話を促すような樹の視線を受けて、仕方無さそうに顔を上げると説明を始めた。

「北勇治という人が、外から帰って自分の部屋の戸を開いたら、机に向かっている人の後姿があった。『誰だろう、私の留守に部屋で我が物顔にふるまっているのは』と、しばらく見ているうちに、髪の結い方も着ている着物も帯も、普段の自分そのままだと気が付いた。顔を見てやろうと近付くと、その者は向こうを向いたまま障子の細く開けたところを抜けて縁先に走り出た。追いかけて障子を開いて見た時には、どこへ行ったのか、もう姿は無かった。

家族にこのことを話すと、母親は何か隠している様子で、それから間もなく勇治は病気になり、その年のうちに死んだ。これで北家では三代続けて当主が同じ死に方をしている。

…とまぁ、そういう奇談だよ。今ではドッペルゲンガーなんて呼ばれてるけどね」
「へぇ……」
そういう話が昔から奇談として存在する事にも驚いたが、怜奈の博識にも正直驚いた。こんな内容の事を掘り込んで知っている人など、現代社会においてそうそう居るものではない。
「それってさ、一般的には自分の魂の抜け出した姿だとかって言うのかな」
「さあね。霊的な生き写しというくらいだから、そんなとこじゃない？それから特徴としては、会話をしないとか、本人に縁のある場所に現れるとか」
全くその通りだった。
樹の見たものは、喋ることもしないし、樹に縁のある場所に現れる。
「死期が近い人が見るとも言うけど、魂が抜け出しているから、肉体が耐えられなくて間もなく死ぬという話もあるらしいね。それから、脳腫瘍だって説もあるらしい」
「脳腫瘍？」
「側頭葉と頭頂葉の境界領域。ここは、体のイメージを司る領域だと考えられてるらしくてね。そこに腫瘍が出来て機能が損なわれると、自己の肉体の認識上の感覚を失い、肉体とは別の「もう一人の自分」が存在するかのように錯覚することがあると言われているらしい。実験済みのものらしいよ。それから、偏頭痛の原因でもある、脳の血流変動による機能低下によってって話もあるね。もう一人の自分を見たとされるリンカーンや芥川龍之介は偏頭痛持ちだったとか」
「へぇ…」
怪奇現象だと思っていたものの見方に、そんな科学的見解も存在するんだというのが、なんだか新鮮に感じられた。
「まぁこの話は、第三者にも見えるというなら除外すべきだけど」

「どうだろう、人が居ない場所でしかまだ見た事がなくて」
いつも、樹がそれと遭遇するのは自分の部屋ばかりだった。外で見たのは今日が始めてだ。それも誰も居ない場所、人の少ない時間帯だったから、誰かが見ているという可能性はあまり高くない。樹の知らないところで樹を見たという話も、今のところまだ誰からも聞いていない。
「逃れる方法って無いのか？」
「どんな意味合いでもいいから罵声を浴びせる　ってのは聞いた事あるけど？根拠は知らないし本当かどうかも知らないよ」
なるほど、それは実践するにはちょっと根性と冷静さが必要だ。
「まぁ、見ても助かったなんて話もあるし、今のところ何とも言えないね」
「…そっか」
自分が体験しておいて何も調べていない、というのも珍しいのかもしれないが、体験していない人がよくそこまでの知識を覚えているもんだと感心する。
つまり怜奈は、そういう人だった。
何故か、そういう類の話に妙に詳しかった。
「――――それで、何でその話を私にしようと思ったの？」
「…ああ、それは、」
多かれ少なかれ、最初からその話をするつもりがあった事はとうに見抜かれていたらしかった。
「…視えるんだろ？そういうの、相談する相手居なくてさ。俺は視えるけど、何も出来ないんだよ。今までは自分に害のあるような事は無かったし。まぁ、昨日依月に逢うまでは誰にも話す気なんか無かったけど。話しても誰も信じないだろうしさ」
「そう」
それだけ答えると、怜奈は運ばれてきたサンドイッチを食べ始めた。さっきまでの話の影など感じないような、他人事のような反応。けど、これが怜奈という人柄だという事は後々になって痛感する。

彼女は、いつも何処か焦点の合っていないようなぼんやりとした雰囲気を持っているのだ。それゆえに、心の内が人には解らない。鋭いまでに凛とした目が、さらにそれを強調させてしまっている。けど実際のところは、見ず知らずの樹の面倒を見て話まで聞いてくれる普通の人だという事を、樹はなんとなく感じていた。

彼女は、きっと本当は優しいのだと。

「今日は帰ると言ってたっけ」

「ああ、一応な。着替え何枚かは持ってるけど、それだけって訳にもいかないし。家で見る頻度が一番多いから安心しては眠れないけど、仕方ないよ」

「泊まっても構わないよ？」

「けど、そこに出ないとも限らないだろ？」

「――――昨日私の部屋で、何か視えた？」

「いや、視えてないけど……って、そういえばそうだな」

もう一人の自分が見えなくても、大概別の何かは視えたりする事が多かった。もちろん視えない日もあるが、こういう視えやすい体質の人間には、総じて寄ってきやすいものだ。怜奈の部屋で全く何も視えないし気配すら感じないというのは、少し不思議だった。

「だから、泊まっても構わないよ。余程の事がない限り、あの部屋では視えないから」

「…それって、何か張ってるのか？結界的なもの」

「まぁ、そんなとこ」

「けど、これ以上迷惑かけるのは、」

「私、別に人が居ても居なくても気にしないから」

「ああ、そう、」

相変わらず、男の樹から見ても怜奈か格好よかった。

「…悪い、じゃあ、荷物取りに行って終わったら連絡するよ。番号教えてくれる？」

「お好きに」

そう言うと、怜奈はポケットから携帯を取り出した。そのまま携

帯をテーブルの上を滑らせると、調度樹の前辺りで止まる。
個人情報にも興味無し。といった感じだ。
それがまた、樹にとっては怜奈らしいと感じてしまった。
受け取った携帯と自分の携帯を開いて、樹はアドレスと番号の登録を進める。
男の子というのは、大体が女の子よりは機械系の扱いには詳しい。樹もまたその一人で、携帯やＰＣの扱いには人並みだが慣れていた。
そして、自分の携帯に登録する怜奈の名前で、動きを止める。
「…それにしてもさ、」
「…？」
「『依月』って呼ぶの、違和感あるよな。自分の名前呼んでるみたいで」
「…別に苗字で呼ばなくていいけど」
「じゃあ、『怜奈さん』？」
「…『さん』付けは好きじゃないって言わなかった？」
「じゃあ、『怜奈ちゃん』」
そう言われて、怜奈はあからさまに眉を寄せた。
「……気持ち悪い」
「う…、じゃあ、何て呼べば？」
「呼び捨てで構わないけど」
「『怜奈』かぁ。何か親しそうだな」
そう言って、樹は少し笑った。
「それじゃあ、私は親しみを込めて『篠田くん』って呼ぶわ」
「それ、全然親しそうじゃないんだけど」
意外と面白い人だなと、樹は心の中で笑った。
そして、結局当たり障り無く”依月怜奈”とフルネームで登録を済ませた。

＊

その日、怜奈と喫茶店で別れた後、樹はバスに乗り、自分のアパートへと帰ってきた。

女の子の家にお世話になるというのは正直気が引けるし緊張もしない訳ではないが、夜な夜な自分とそっくりな何かが、眠っている自分を覗き込んでいるかもしれないと想像すると、一番頻度の高い自宅で眠るのは避けたいところだった。考えるだけでも、落ち着いて眠れる気がしない。大学でも見かけた以上、宿代わりに利用していたその辺のネットカフェも想定範囲内に入ってしまう。それに、正直一人暮らしに毎日外で寝るというのはお金のかかる問題で、事情を知って安全に匿ってくれる場所があるのならこれ以上無い程有り難い事だった。

友人の家に泊めてもらうにしても、何かしら理由を作らなくてはならない。嘘の苦手な樹にとって、それは悩みの種を増やす以外の何ものでもなかった。

数日振りにアパートに戻った樹は、部屋に入ってまず、カバンに詰め込んでいた数日分の洗濯物を洗濯機に放り込んだ。2～3日とはいえ、同じ服ばかり着て大学に行く訳にもいかず、肌寒いこの時期のせいもあって着替えはかさばっていた。もちろん、いつも大学まで持ち歩いていた訳ではない。近くの駅にあるコインロッカーに着替えを詰め込んだカバンを押し込み、宿を探す頃になると取りに行っていたのだ。

洗濯機を回している間に、シャワーと軽い夕食を済ませる。喫茶店でサンドイッチを食べたのはつい1時間程前だが、やはり夕飯に

は物足りなかったらしい。きっと怜奈の方は、あれを夕飯にしてしまったのだろうけど。
３０分程で洗濯も終わり、室内に洗濯物を干して、新たに数日分の着替えをカバンに詰め直す。
そして、何となく、部屋を見回した。
男の一人暮らしにしては物が少なく、綺麗に片付けられた部屋。
玄関を入るとすぐ右にキッチンがあり、左手に浴室などがある。
その３メートル前後の廊下を過ぎた奥にある、一間の部屋。７～８畳くらいはあるやや広めの部屋は、男の一人暮らしには充分な広さだ。
そしてその部屋に置かれたテーブルのところに、よく樹は座っている。
それと同じように、あの樹そっくりな何かもそこ座っている事が多い。

怜奈にあまり迷惑をかけないためにも、早く何とかしなくてはいけない。
けど、何をどうすればいいんだろうか。
視えるだけで何も出来ない自分に、何か出来る事があるんだろうか。
それ以前に、もし死んでしまうとしたら、残された時間はどのくらいなのだろう。
今のところ、身体に妙な症状は無い。頭痛も無い。
けど、自分が死んだところで、何が変わるというのだろうか。
それはそれで楽かもしれないけど、まだ死にたいとは思わない。

樹は、自分の存在を希薄に感じているところがあった。
幼い頃に自分と他人は見えているものが違う、解ってもらえない、自分と他人は違う、そして何より、異常なのは自分の方なんだと知ってしまった時から、自分というものの価値観を希薄に感じ始めた

のだ。
視える事に対して、特別性なんて感じなかった。樹にとって視えるという事は、他人への隔たりになってしまった。
けれど、視えなくなればいいとも思わなかった。視えているそれらは、確かにそこに存在するから視えているだけに過ぎないのだから。
死にたいとは思わない。自分は何も悪い事はしていないから。
他人を拒絶しようとも思わない。関わってくれるのは、有り難い事だと思うから。
けど、誰かと深く関わり合おうとも思わない。それは自分を知られるという事だから。知られてしまった時に、相手を傷付けてしまうと思ったから。

では、怜奈に知って欲しいと思ったのは何故だろう。
彼女が傷付かない人だと思っている訳ではない。
自分と同じで視えるからだろうか。
それとも――――――――――

「……また忘れてた、」
樹が部屋に戻ってきてから、既に1時間以上経っていた。
お世話になる立場上買い物をしてから行こうと思っていたので、もう出かけなくてはいけない時間になっていた。
どうやら自分には、考え事をしていると時間を忘れる癖があるようだと、心の中で自嘲する。
大学に必要なものをまとめたカバンと着替えの詰め込まれたカバンを持ち、戸締りと消灯を確認すると、樹は静かに部屋を出た。
誰も居なくなった部屋に浮かび上がる、樹と同じ人影を残しながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8909x/

LOST IN

2011年11月16日17時03分発行